

仏像にみる二つの姿

西村公朝

(東京芸術大学名誉教授
元美術院国宝修理所所長)

釈尊は誕生と同時に、両手で天と地を指さし、天上天下唯我独尊といわれたという。その時の姿を造形したのが誕生仏である。

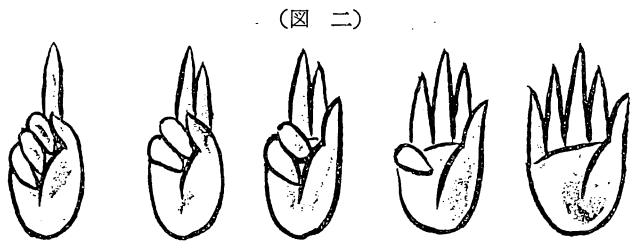
ところがその像で、両手の形について古来二つの型がある。それは、右手を上方に左手を下方にしたものと、その逆の左上方向と右下方向のものである。(図一)前者はわが国に多くみられ、後者は中国・朝鮮半島のものにみられる。

また、その天と地を指さしたという指の形にも五つの型がある。(図二)親指から小指に向って、各指を第一・二・三・四・五指とすると、まず第二指一本のものと、次に第二・三指の二本、また第一・二・三指の三本と、第一・二・三・四指の四本と、五本の全指を開いているものとである。

(図一)



仏像にみる二つの姿



(図二)

に次のような名称がつけられている。(図三)



(図三)

何故、両手の位置に二種があり、指さす指に五種あるのか、この点が不思議である。また、この両手の位置については、この誕生仏だけでなく他の仏像にもその例は多くみられる。これは何故なのか。

まず誕生仏にみられる指の形は、密教でいう印相的に考えれば、その理由は自から解ける。例えば印相的には、五本の各指

手をいろいろな組み合わせることによって、その仏の法力が発揮されるというのである。

また各指の三つの関節部にも、それぞれに名称がつけられている。これらを基にして、両

手を用いて、テレビのような電気器具は、その内部には、複雑な構造と配線などがあり、これらを間違いない組み合わせることによって、電波を正しく受け、正しい映像を私たちにみせてくれる。仏像の印相も、これと同様なのである。

以上のことから、誕生仏の指にみられる五種の形については、少し本題から離れるので略し、両手の位置についてのみ考えてみよう。

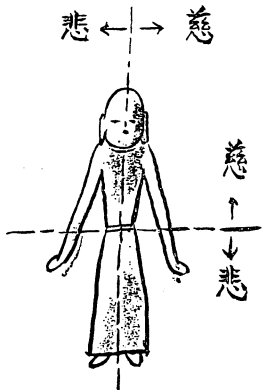
わが国に仏教が伝えられて以来、多くの仏像が造られた。その中で如来像は、右手上左手下のものが最も多い。これに対し、中国や朝鮮半島のものでは、左手上右手下のものが多い。

次に菩薩像では、右手上左手下は、わが国では飛鳥時代に多く、白鳳以後のものは左手上右手下が多く、この形が今日まで続いている。この菩薩像については、中国や朝鮮半島のものも同様のものである。

(図五)



(図四)



仏像にみる二つの姿

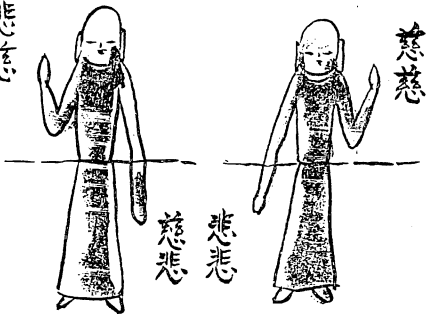
そもそも仏像とは、仏の姿を形としたものである。では仏とは何か、という大変むずかしい問題に直面するのであるが、この点については、古来という三身(法身・報身・応身)の姿を、人格化表現にしたのが仏像であるという簡単な方で終え、本稿を進めたい。

さて仏像には、何故二つの形があるのか、これを結論からいうと、実はこの形が、仏たちの本心を私たちに示している手信号なのである。

そもそも仏像とは、仏教における信仰の対象であり、また仏教の真髄は慈悲だといわれている。つまり仏像の形は、この慈と悲の合体表現であって、それが仏の本心を現しているのであるが、この合体の心が、私たち衆生には簡単に理解できない。むしろ、慈と悲を分解した方が解りやすいのである。

そもそも慈悲とは、親が子に対するような愛情のことである。その子に親不孝されても、やはりその子が可愛いという親心のようなものである。

(図六)



慈悲

施無畏とは、苦を取り去り樂を与えてくれることであり、与願とは、何ごとも無条件で願いをかなえてくれることである。

これらの形を総合してみると、その仏像がどんな心を私たちに示しているかがわかる。つまり右手上方は慈悲、左手下方は慈悲となる。これに対し、左手上方は慈悲、右手下方は慈悲となっている。(図六)

さてこの両者から、それぞれの仏の心を考えると、後者の像は、慈と悲の各二乗となっていることから、前者の像より、より強力な慈悲の姿だということになる。

また古来インドでは、人間の身体を縦に正中線で二分し、右側を仏・清浄とし、左側を自我・不浄としている。(図七) だから食事は必ず右手で、不浄なものは左手を使っている。

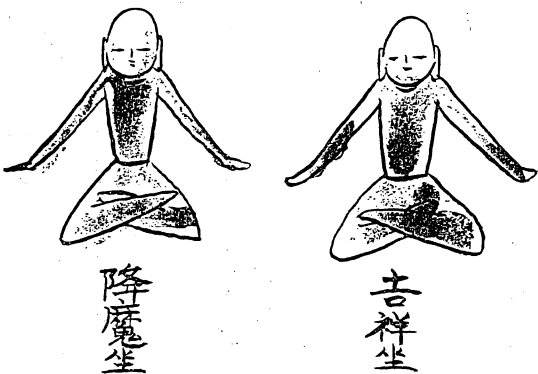
(図七)



このような、仏と自我の二面をもつわれわれの合掌は、右手の仏と左手の自我との合体、つまり、私が仏と一体になった、またはなりたいた願う形なのである。そしてこの二面の考え方は、仏像の形にも応用されている。

仏像で坐像の場合、結跏趺坐する足の組み方に、左腿の上に右足をおくときは、我を仏でおさえることから降魔坐といふ、その逆の右腿の上に左足をおくときは、仏の上に自分が乗り、人々を救うという大乘的教えの姿として、これを吉祥坐といっている。(図八) また仏像の腹前で組む定印も、左手の上に右手をおくものとその逆とがある。これも足の場合と同様に、右手上が降魔、左手上が吉祥の印となっている。

(図八)



さて仏教信者は、仏像を透して真の仏に拜む。また古来僧たちは、この仏に拜むことを大衆に教えてきた。しかし、真の仏の本心はどうだろう。おそらくわれわれ衆生に対しては、それこそ仏教信者であろうがなかるうが、また他の宗教信者であっても、仏からみれば、すべての生きものは、みな可愛いわが子である。だから、すべてを平等に見守っているのである。例えば、太陽は全世界のすべてに光を与えているように。

私たちは仏の姿を造形して、その像を信仰の対象としている。しかし仏からみれば、それは全く不要なものである。

仏像にみる二つの姿

「お前たちが拝まなくとも、いつも優しく見守っているんだよ」と、いっておられるのである。

私たち仏教信者は、この親心のような仏の本心は、僧から教えられてよくわかつている。でも、わかった上で拝めば、もっと親しく私を見守ってくれるかもしれない。また僧の立場からすると、この仏の心を知らないものには教えてやる義務がある。だから仏像を造り、その像を透して拝むことから教えねばならない。

この仏の心を教え、そして拝むことを教えているのが右手を上方にした像であり、仏の真の優しい心、つまり拝まなくとも見守っているんだよという像が左手上方なのである。つまり右手上像は厳しい表現、左手上像は優しい表現となっているのである。

古来、中国や朝鮮半島では、この両者の姿を同時に造形していたのではないかと思う。そして完全な仏教国になった時点で、この左手上像が多く造られていたのではないだろうか。この点、日本ではどうか。

紀元六世紀に、朝鮮半島から伝えられた仏教は、直ちに日本人の全てに理解されたとはいえないであろう。だからわが国で、最初の頃に造像された飛鳥寺や法隆寺の釈迦如来像は、右手を上にした。また菩薩像にしても、法隆寺の伝百済観音像は右手上像になっている。

ところが次の白鳳期になると、わが国でも仏教が定着してきた。つまり仏の本心が、多くの人々に理解できるようになってきた。だから、法隆寺の夢違観音や薬師寺の聖観音のように左手上像となり、これが菩薩の通常と思える位に形式化され、今日に至るまで変ることなく続いているのである。

しかし如来については、何回もくりかえすようであるが、右手上にして、いかにも厳しい父のように、仏を拜めとすすめているのである。

このように仏像には、二つの姿がある。ここでもしも、厳しい姿のみとなればどうだろう。それこそ反って、仏教はむしろかしいとって亡んでしまうであろう。やはり、優しい姿と二体揃ってこそ、われわれ子供には親なる仏

にあまえることができるのである。

そしてその親心が、私たちには心のふるさととなっていた。だからこそ、今日もなお、仏教が私たちの心の支えになっっているのではないだろうか。